

作業療法士だから できる リハビリになる 仕事づくり

障害者が社会で活躍できないのは、それを支えることができない地域に課題がある。支える手が足りないのなら、自分でつくろう。若い作業療法士たちは、病院を出て、地域に支える拠点をつくりはじめた。一人ひとりの「実現したい暮らし」を支えることで、彼らは必ず地域を支える存在になる。熱い思いを胸に、がむしやりに走り続ける。



左が就労事業担当の藤島健一さん、右が代表の岩下琢也さん

作業療法士から、経営者へ
待ち合わせ場所に行くと、スーツに身を包んだイケメン二人に迎えられた。金沢QOL支援センター株式会社代表の岩下琢也さんと、就労事業担当の藤島健一さん。それぞれの名刺には、「作業療法士」の文字。二人とも、以前は病院で作業療法士として働いていたと言う。代表の岩下さんが「不安しかなかった」けれど、自分で会社を起したのは、四年前の二〇一二年。当時まだ二七歳。それまでは病院で働いていて、経営の経験はまったくなかった。

内装にもこだわったデザイン部門の事務所。少し閑散としているのは、写真に写りたくない人が退出したため



作業療法士とは、日常生活も含めたあらゆる作業活動を通して「心と身体」のリハビリを行う専門家。理学療法士が、身体の機能回復をゴールにしているとすれば、作業療法士は、その人の送りたい生活を実現するための心と身体、両方をサポートするのが仕事。何ができるようにしたいか、ゴールを患者とじっくり決めていくからにはじまる。ごはんを一人で食べられるようになりたい、という目標ならば、箸を使えるようにリハビリをするが、それがスプーンになっても構わない、と考える。あくまでその人が送りたい生活を実現することが目標で、一〇〇%

機能が回復しないなら、その中でどうやってやりたいことを実現できるかに知恵と、工夫を凝らす。

主に病院や老人施設で、お年寄りのリハビリに関わる作業療法士が多いが、精神障害者や子どものリハビリの領域でも欠かせない職種だ。

地域に受け皿が足りないなら、自分でつくろう

専門学校を卒業し、精神病院で作業療法士として働きはじめた岩下さん。病院内で次々と活動を立ち上げた。農業に陶芸、革細工…。できることはなんでもやってみたい。がむしや